

# 浙江省嵊州方言の一回的動詞をめぐって

陳 薇

**要旨** 本稿は中国語において、「敲、閃」を代表とする一回的動詞を活動動詞から独立させ、新たな動詞タイプを設ける必要があるかについて検討する。筆者は動詞分類を行う際に、意味の違いでなく明確な文法的振る舞いの違いを求めるべきだという立場で、浙江省嵊州方言を中心に、標準語との比較を兼ねて考察を行った。嵊州方言に関しては、「记」を用いた活動動詞と一回的動詞を区別できる三つの文法テストを提示する。嵊州方言の「记」は一回的アスペクトマーカールとみなすことができ、嵊州方言では一回的動詞というタイプを立てる根拠も十分であると主張する。しかし、標準語ではそうしたテストは有効ではない。たとえば、「记」に対応する形式である、動詞の前に置かれる「一」は動詞との共起制限を示さない。従って、標準語では一回的動詞を独立した動詞タイプとして立てる根拠が不十分であると結論づける。

**キーワード** 一回的動詞 動詞分類 アスペクト 呉方言

## 0. はじめに

本稿では先行研究を確認しながら Vendler (1967) の英語動詞4分類を理論的背景とし、中国語において一回的 (semelfactive) 動詞という動詞タイプを立てる必要性があるか否かについて議論する。議論には中国語の一変種であり、筆者の母語でもある嵊州方言じょうしゅうのデータを中心に引き上げ、一回的動詞と活動動詞を区別するテストを提示する。更に、嵊州方言では両者を区別するために有効であるテストが標準語でも有効であるか否かについて検討する。最後に、通言語的視点から、中国語以外の言語で一回的動詞が形式的にマークされる言語を紹介し、標準中国語及び嵊州方言において一回的動詞という動詞タイプを立てる必要があるか否かについて議論する。

## 1. 先行研究

### 1.1. 理論的背景

Vendler (1967) では英語の動詞アスペクトを、状態 (state)、活動 (activity)、達成 (accomplishment)、到達 (achievement) の4種類に分類し、それぞれを次のように定義している<sup>1)</sup>。

状態動詞は時間的な制限に縛られない恒常的な状態を表し、\*I am knowing him. のように進行形にすることができない。活動動詞は意図的に開始したり終了したりできる行為を表し、He is singing. (彼は歌っている) のように進行形にすると、その活動が継続中であることを意味する。達成動詞は何らかの活動の結果、最終的な目標に至るようなプロセスを意味する。例えば、He walked to school. (彼は学校まで歩いた) という文が表すのは「walk (歩く)」という活動を行なった結果、「学校に到達した」という結果を得たという意味である。活動動詞が表す動作は力がある限り、無限に続くが、達成動詞が表すイベントは内在的終結点 (目標を達成する時点) があり、永続可能な動作ではない。達成動詞を進行形にすると、He is walking to school. (彼は学校へ向かって歩いている) のように、目標に向かっての過程を表すことになる。また、到達動詞は、find, win のような瞬間的に起こる動作を表すものである。表1はVendler (1967) の英語動詞の4分類と三つのパラメーターの関係をまとめたものである。

それぞれのタイプの動詞は時間の面において独自のアスペクト特徴を持ち、それが文法的振る舞いに反映される。動詞を分類するに当たって、その動詞が進行形にできるか否か、for an hour や in an hour といった時間表

表1 Vendler (1967) の動詞4分類

動詞分類	[± dynamic]	[± durative]	[± telic]	例
State	-	+	-	know, love, believe, possess
Activity	+	+	-	run, walk, swim, push a cart
Accomplishment	+	+	+	walk to school, paint a picture
Achievement	+	-	+	recognize, spot, find, lose, reach, win

現と共に起できるか否かのような様々なテストが考案されている。

## 1.2. 一回的 (semelfactive) 動詞に関する議論

Vendler の研究をきっかけに多くの研究者が様々な言語に対してこの4分類の妥当性を検証してきた。Vendler の主張を支持する研究者もいる一方で、異なる意見を唱える研究者も少なくない。その代表的なものとして、Smith (1991) と van Valin (2005) の英語に関する研究が挙げられる。Smith (1991) と van Valin (2005) は Vendler の4分類に加え、一回的 (semelfactive) 動詞という新たな動詞タイプを設けている。本節では Smith (1991) と van Valin (2005) で提示された一回的動詞の定義とこのタイプに分類される典型的な動詞を紹介し、英語での有効性についてどのように論じられているかを紹介する。

Smith (1991) は英語の動詞を状態 (state)、活動 (activity)、達成 (accomplishment)、一回的 (semelfactive)、到達 (achievement) の五つに分類し、一回的動詞を「結果を含まない単純イベントであり、動態的、未完了、瞬間的という素性を持っている」と定義している<sup>2)</sup>。また、van Valin (2005) は英語の動詞を状態 (state)、活動 (activity)、到達 (achievement)、一回的 (semelfactive)、達成 (accomplishment)、活動的達成 (active accomplishment) の6つに分類し、分類方法には Vendler (1967) や Smith (1991) と違いが見られるものの、Smith と同様に一回的動詞を立てる必要性を認め、「一回的動詞は結果を起こさない瞬間的なイベントである」というように非常に類似した定義をしている。

また、二人は典型的な一回的表現として、cough (咳をする), knock at the door (ドアをノックする), hiccup (しゃっくりする), blink (まばたきする), the light flickers (灯が点滅する), tap (軽く叩く), peck (〈鳥が〉くちばしでつつく), scratch (搔く), kick (蹴る), hammer a nail (once) (釘を〈一回〉打つ), pound on the table (once) (机を〈一回〉強く叩く), flash (閃く), glimpse (ちらりと見る)などを挙げている。

これらの動詞は従来、活動動詞として扱われてきたが、Smith も van Valin も (1)-(2) のように単独で用いるときには動作を一回行うという単純イベントを表すのに対して、for an hour などの時量表現と共に起するときや進行形にするとときには動作が繰り返し行われるという動作の反復を表す点

で活動動詞と区別している。

- (1) a. Mary coughed. (メアリーは咳をした。)  
 b. Mary coughed for an hour. (メアリーは一時間咳をした。)  
 (Smith 1991: 18)
- (2) a. Kim is dancing/singing. (キムは踊っている／歌っている。)  
 b. The light is flashing. (明かりが閃いている。) (van Valin 2005: 36)

### 1.3. 中国語の動詞分類に関する先行研究

前述したように、Smith (1991) と van Valin (2005) は英語においては一回的動詞という新たな動詞タイプを立てる必要性があると強く主張し論じている。中国語にもこのタイプの動詞を立てる必要があるのだろうか。一回的動詞に関する意見は中国語の先行研究ではばらつきが見られ、必ずしも一致しているとは言えない。

马庆株 (1981) は動詞が時量表現を目的語として取るときの意味的相違によって動詞分類を行う際に、「敲, 碰, 打, 咳嗽」などの動詞を活動動詞と同時に挙げ、独立したタイプを設けてはいないが、典型的な活動動詞との相違は認めている。これらの動詞が表す動作自体は持続できないため、動作の繰り返しを表す点について、文末の注5で言及している。陈平 (1988) は [±静態 (静态)] [±持続 (持续)] [±完了 (完成)] の三つのパラメーターを用いて文のアスペクトを状態 (state, 状态)、活動 (activity, 活动)、達成 (accomplishment, 结束)、複雑変化 (complex change, 复变)、単純変化 (simple change, 单变) の五つのタイプに分類している。そして、各分類にはそれと対応する動詞タイプが表2のように挙げられている。

表から分かるように、陈平の活動動詞は「跳, 打, 咳嗽」まで含み、他の活動動詞とは区別しないことが分かる。また、He (1992)、郭锐 (1993) の分類方法は陈平と違いが見られるが、これらの動詞を活動動詞として認めるのは陈平と同様である。更に、邓守信 (1985) と Tai (1984) は一回的動詞への言及がなく、それに相当する動詞の列挙も見られない。近年になると、これらの一回的動詞と見なされる動詞を活動動詞から独立させ新たな動詞タイプを立てる傾向が見られ、その中で Smith (1991)、戴耀晶 (1997)、Xiao & McEnergy (2004) の研究が挙げられる。戴耀晶 (1997)

表2 陈平 (1988) の5分類

(Situation Type, 情状类型)	静態	持続	完了	例
状態 (state, 状态)	+			属于, 喜欢, 知道, 坐, 挂
活動 (activity, 活动)	-	+	-	跳, 打, 咳嗽, 看, 吃, 想
達成 (accomplishment, 结束)	-	+	+	跑三千里, 写一本谈中国古代建筑的书
複雑変化 (complex change, 复变)	-	-	+	变成, 改良, 减少, 跑来, 走进
単純変化 (simple change, 单变)	-	-	-	死, 认出, 断, 坐, 站, 打破, 写错

は中国語の動詞を図1のように分類している。

戴耀晶 (1997) では本稿が用いる「一回的 (semelfactive)」という用語を使用していないが、「踢, 砍, 碰, 咳嗽」が属する瞬間動作動詞がこれに最も近いと言えよう。戴耀晶 (1997) がこのタイプの動詞を立てた理由はこれらの動詞は持続を表すアスペクトマーカの「着」が後続すると、動作が繰り返し行なわれるという意味を表す点にあり、具体的な文法テストは提示していない。また、Smith (1991) と Xiao & McEnergy (2004) も一回的動詞を活動動詞と区別して独立した動詞タイプを設けているが、そ

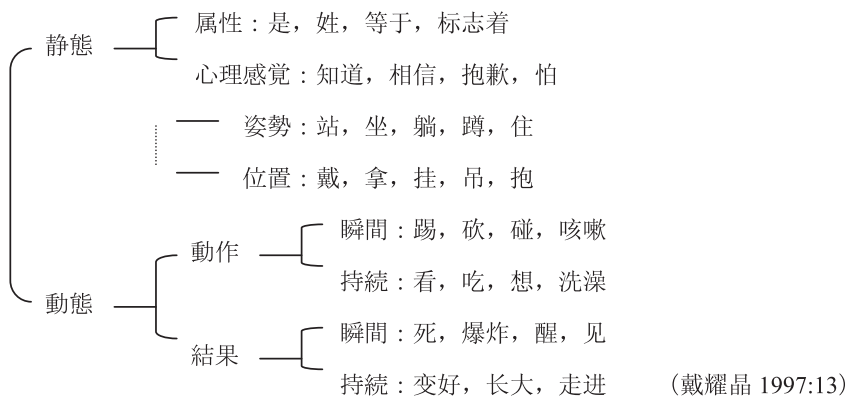


図1 戴耀晶 (1997) の動詞分類

の根拠は前節で見てきた英語での必要性を論じる際に使用された動作の持続か反復かの意味上での違いである。

このように、これまでの先行研究の中では、一回的動詞が活動動詞など他のタイプの動詞と具体的にどのような文法的振る舞いの違いを見せるかについては十分に説明されておらず、一回的動詞というタイプを立てる必要性は十分に議論されているとは言えない。本稿は一回的動詞と活動動詞が形態的・文法的に異なる振る舞いをすることを示すテストを提示することを目的とし、中国語において一回的動詞を独立した動詞タイプとする必要があるか否かについて議論する。議論に用いるのは嵯州方言のデータを中心とし、また、標準中国語との対照研究も随時行う。なお、動詞分類ではないが、標準中国語には「往地下一跳（床へ跳び下りる）、接住信一看（手紙を受け取って、ふと見ると）」のような動詞の前に置かれる「一」を一回的アスペクトマーカ―として認める研究がある。本稿の議論と関わる問題なので、ここで紹介する。

ドラゲノフ（龙果夫 1958: 181）は「現代漢語において、“一”が補助詞として動詞及び形容詞と結合する際に、動作の一回的または弱まりを表すマーカ―として使用される」とし、「一」を「動詞の一回式」と呼んでいる<sup>3)</sup>。また、ヤーホントフ（1987: 243-245）は「現代語においては、動詞から作られる計数語と動詞そのものとの結びつきは、一体となって暫時アスペクト形という単一の文法形式をなしている」と述べ、「この語形をロシア語に訳す場合には、接辞の -nu- を持つロシア語の一回アスペクト（瞬時アスペクト）過去テンス動詞を用いるのが、もっとも適当である」としている。しかし、「一」を一回的アスペクトマーカ―として認めない研究もある。陈光（2003）は動詞の前に置かれる「一」は文を完結させる働きという典型的な用法と、文を完結させず後続する文があることを示す非典型的な用法があるとし、「一」を完全なアスペクトマーカ―として認めず、「準形態詞」と呼んでいる。また、Chao（1968）、朱德熙（1982）、刘月华（2001）などの文法書を見てみると、「一」に関する議論が見られず、中国語内部の意見でもばらつきがあるのが窺える。

## 2. 嵊州方言と標準語における一回的動詞

### 2.1. 嵊州方言に関するデータの紹介

前章では、一回的動詞が先行研究でどのように扱われてきたかを確認したが、動詞の性質の違いは文法上にも反映されるのだろうか。本章では、浙江省の嵊州方言のデータを中心とし、できる限り多くのデータを列挙し、嵊州方言の視点から一回的動詞という動詞タイプを立てる必要があるか否かという問題を考察していく。

嵊州は浙江省紹興市に属し、省の東北部からやや中部寄りのところに位置している。東は寧波市、南西は金華市と隣接している。嵊州は呉語が使用されている地域のほぼ中央に位置しているため、嵊州方言は呉語太湖片臨紹小片（北部呉語）に属しながらも、語彙や文法面においては、蘇州を代表とする北部呉語と温州を代表とする南部呉語の両方の要素を取り入れている。嵊州方言には方言独特の語彙や文法現象も存在するが、動詞分類の枠組みとしては標準語と大きな違いが見られない。また、嵊州方言は地域によって差異が見られるが、本論では市内で用いられている方言を研究対象とする。議論に関しては主として嵊州方言の回数表現の「記」から見た一回的動詞と活動動詞の文法的振る舞いの違いを中心に進めていく<sup>4)</sup>。それと同時に、標準中国語との対照研究も行う。以下に、嵊州方言の「記」について簡単に紹介しておくことにする。

### 2.2. 嵊州方言における回数表現「記」と共起できる一回的動詞

嵊州方言の「記」には動作の回数を数え、動量詞的に機能する「記<sub>1</sub>」と短い時間を指す「記<sub>2</sub>」の二つの基本機能を持ち、標準語の動量詞の「下」或いは動詞の前に置かれる「一」に相当する<sup>5)</sup>。しかし、動詞と結果補語の間に現れるなど、標準語の「下」或いは「一」が持たない用法もあり、文法化がより進んでいると考えられる。本稿に挙げる方言のデータはすべて筆者による作例である<sup>6)</sup>。各文の文法性判断に関しては各年齢層の5人の嵊州方言母語話者に確認している。まず「記」の基本用法の具体例を見てみよう。

「記<sub>1</sub>」は動作の回数を数える動量詞であり、標準語の「下」に相当する。

- (3) 伊<sub>他</sub> 敲 得<sub>了</sub> 记 桌凳<sub>桌子</sub>。  
 fi<sup>112-12</sup> k<sup>h</sup> ɔ<sup>534-53</sup> tə<sup>74</sup> tci<sup>24-44</sup> tsoŋ<sup>24-42</sup> tən<sup>24-42</sup> (彼は机を一回叩いた。)

表3 嵯州方言における一回的動詞

	動詞	発音	意味		動詞	発音	意味
1.	敲	[k <sup>h</sup> ə <sup>534</sup> ]	打つ、叩く	21.	鑿	[bi <sup>13</sup> ]	モノを硬い表面に当て摩擦させる
2.	碰	[baŋ <sup>13</sup> ]	触る	22.	拵	[nioŋ <sup>?</sup> ]	揉む
3.	吹	[ts <sup>h</sup> ə <sup>534</sup> ]	吹く	23.	湮	[mi <sup>42</sup> ]	少しずつ飲む
4.	揺	[fiə <sup>312</sup> ]	揺れる	24.	拵	[lo <sup>112</sup> ]	手でものを集める
5.	撞	[dzəŋ <sup>13</sup> ]	ぶつかる	25.	剝	[ly <sup>534</sup> ]	指で掘る
6.	插	[ts <sup>h</sup> əŋ <sup>4</sup> ]	挿す	26.	挖	[vəŋ <sup>4</sup> ]	掘る
7.	揩	[k <sup>h</sup> a <sup>534</sup> ]	拭く	27.	搵	[tei <sup>e</sup> <sup>534</sup> ]	道具でものを挟む
8.	动	[doŋ <sup>13</sup> ]	動く	28.	敲	[t <sup>h</sup> Y <sup>42</sup> ]	モノを平らに広げる
9.	跳	[t <sup>h</sup> io <sup>24</sup> ]	跳ぶ	29.	剥	[poŋ <sup>4</sup> ]	皮をむく
10.	揷	[tɕ <sup>h</sup> in <sup>24</sup> ]	押す	30.	擘 <sub>1</sub>	[p <sup>h</sup> əŋ <sup>4</sup> ]	開く、広げる
11.	嗽	[ɕY <sup>24</sup> ]	咳をする	31.	擘 <sub>2</sub>	[p <sup>h</sup> əŋ <sup>4</sup> ]	手で折る
12.	戳	[ts <sup>h</sup> oŋ <sup>4</sup> ]	突く	32.	閃	[sə <sup>42</sup> ]	閃く
13.	踢	[t <sup>h</sup> iEŋ <sup>4</sup> ]	蹴る	33.	抖	[tY <sup>42</sup> ]	体が震える
14.	喇	[soŋ <sup>4</sup> ]	吸う	34.	拗	[ʔə <sup>42</sup> ]	手で折る
15.	滴	[ti <sup>24</sup> ]	滴る	35.	弹	[dæ <sup>312</sup> ]	弾く
16.	殺	[toŋ <sup>4</sup> ]	棒で叩く	36.	拍	[p <sup>h</sup> əŋ <sup>4</sup> ]	軽く叩く
17.	拵	[dzio <sup>112</sup> ]	こじ開ける	37.	□	[kəŋ <sup>4</sup> ]	まばたく
18.	揩	[zoŋ <sup>?</sup> ]	道具で掘る	38.	□	[ŋa <sup>312</sup> ]	体で擦る
19.	斲	[tsæ <sup>534</sup> ]	刃物で刻む	39.	摸	[moŋ <sup>4</sup> ]	触れる
20.	踵	[ts <sup>h</sup> oŋ <sup>24</sup> ]	暴れ回る	40.	推	[t <sup>h</sup> e <sup>534</sup> ]	押す

(4) 伊<sub>他</sub> 頭皮<sub>頭</sub> 揺 得<sub>了</sub> 三 记。  
fi<sup>112-12</sup> dY<sup>312-31</sup> bi<sup>31-21</sup> fiə<sup>312-31</sup> təŋ<sup>4</sup> sə<sup>534-53</sup> tɕi<sup>24-42</sup>

(彼は頭を三回振った。)

「记」と共に起る動詞は一部の身体動作、あるいはモノの様態の描写に関する動詞に限られており、ほぼ閉じたクラスを作る。これらの動詞



が表す動作は結果を含まず、かつ反復できる、つまり本論文で扱う一回的動詞に当たる。「記<sub>1</sub>」の前には“一”を含めて“二、三…n”などいろいろな数詞を置くことができる。筆者が調査したところ、表3のような40の動詞が一回的動詞の振る舞いをしている。

表3から明らかのように、「敲（打つ、叩く）」や「拵（こじ開ける）」、「嘸（吸う）」等のような人間の身体動作を表す動詞が殆どで、それ以外に、「滲（滴る）」や「閃（閃く）」などモノの様態を描写する動詞もわずかであるが存在する。これらの動詞は第1章で紹介した英語の一回的動詞との間に意味的類似性があることが分かる。また、このテストは標準語の一回的動詞と活動動詞を区別する際にも有効である。

「記<sub>2</sub>」は短い時間を表し、標準語の時量表現の「一下（儿）」に相当する。「記<sub>1</sub>」と異なり、「記<sub>2</sub>」の前には数詞の「一」しか置くことができない。次の例を見てみよう。

(5) 等 記 我。

təŋ<sup>42</sup> tci<sup>24-44</sup> ŋo<sup>112-42</sup> ((私を) 少々お待ちください。)

(6) 依<sub>係</sub> 喝 记 看。

noŋ<sup>112-12</sup> həʔ<sup>4</sup> tci<sup>24-44</sup> kʰæ<sup>24</sup> (飲んでみてください。)

「記」はそのほかに標準語で動詞の前に置かれる「一」に対応する場合もある。それらの用法について以下の2.3.で更に述べることにする。

### 2.3. 嵯州方言における一回的動詞の形態・統語的振る舞いの特徴

これまでの先行研究では、活動動詞と一回的動詞の違いを論じる際、持続アスペクト接尾辞と共に起する場合や動詞の後ろに置かれる時量表現「一下」と共に起する場合に、動作の持続を表すか反復を表すかという意味の違いについて言及するのみであった。しかし、筆者の考察に拠ると、嵯州方言では、一回的動詞は使用できない、あるいは一回的動詞は使用できるが活動動詞は使用できないというような文法環境が存在し、一回的動詞と活動動詞が形態的・統語的に異なる振る舞いを見せているのである。本節では嵯州方言のデータを取り扱い、このようなミニマルペアを提示する。以下では、嵯州方言において動詞のタイプによって文法性に差が出る三つの型や文型を示すが、これらはいずれも回数・時量表現である「記」という形態素との共起が問題である。テスト①と②の「記」は標準語の「一」と

対応するもので、テスト③の「记」は標準語で対応する用法がない。また、これらのテストに用いられる「记」は基本用法の「记<sub>1</sub>」に由来するものであるが、「记<sub>1</sub>」と異なって「一」以外の数詞と共起できないため、一回的アスペクトマーカ―ともみなせる、文法化の進んだものと考えられる。

### 2.3.1. 標準語「一 V<sub>1</sub> 就 V<sub>2</sub>」にあたる表現の場合——テスト①〔一记 V<sub>1</sub> 当就 V<sub>2</sub>〕

活動動詞と一回的動詞の文法的振る舞いの違いは標準語の「一 V<sub>1</sub> 就 V<sub>2</sub>」にあたる表現に見られる。「一 V<sub>1</sub> 就 V<sub>2</sub> 了」という文型は二つの出来事のごく短い間隔をおいて継起する、つまり、V<sub>1</sub> という動作が終わったとたんに V<sub>2</sub> という変化が起こるという意味を表す。

(7) a. 他一解释我就懂了。(彼の説明で私はすぐに分かった。)

b. 门一推就开。(扉はちょっと押すとすぐ開く。)

(呂叔湘 1999: 599、訳は呂叔湘 2003: 435)

(7a)は「解释(説明する)」という動作を行なうとすぐに「懂(分かる)」という変化が現れ、(7b)は「推(押す)」という動作を行なうと、すぐに「开(開く)」という変化が現れるという意味の文で、動作と変化の間の時間的間隔が非常に短いことを表す。岷州方言では標準語のように動詞の前に直接「一」を置くような表現がなく、このような意味を表すのに、「一记 V<sub>1</sub> 当就 V<sub>2</sub>」という形式を取っている。次の例を見てみよう。まず、(8)に出ている動詞は「敲(叩く)」と「戳(つつく)」で、前述したように典型的な一回的動詞である。(9)に出ている動詞は活動動詞の「孚(洗う)」と「喝(飲む)」である。

(8) a. 只 花瓶 一 记 敲 当<sub>马上</sub>就 碎 掉 哉了。

tsəŋ<sup>4</sup> fo<sup>534-531</sup> biŋ<sup>312-31</sup> ŋi<sup>4</sup> tci<sup>24-44</sup> k<sup>h</sup>o<sup>534</sup> tɔŋ<sup>534-44</sup> tɕy<sup>24</sup> se<sup>24</sup> diə<sup>312-13</sup> tse<sup>534-22</sup>

(この花瓶は叩いたらすぐに割れてしまった。)

b. 张 纸 一 记 戳 当<sub>马上</sub>就 破 掉 哉了。

tsaŋ<sup>534-53</sup> tsɿ<sup>42</sup> ŋi<sup>4</sup> tci<sup>24-44</sup> ts<sup>h</sup>oŋ<sup>4</sup> tɔŋ<sup>534-44</sup> tɕy<sup>24</sup> p<sup>h</sup>a<sup>24</sup> diə<sup>13</sup> tse<sup>534-22</sup>

(この紙はつついたらすぐに破れてしまった。)

(9) a. ?? 件 衣裳 一 记 孚<sub>洗</sub> 当<sub>马上</sub>就 清爽<sub>干净</sub> 哉了。

dzie<sup>312-22</sup> i<sup>534-53</sup> zɔŋ<sup>312-31</sup> ŋi<sup>4</sup> tci<sup>24-44</sup> fu<sup>24</sup> tɔŋ<sup>534-44</sup> tɕy<sup>24</sup> tɕ<sup>h</sup>iŋ<sup>534-53</sup> saŋ<sup>42</sup> tse<sup>534-42</sup>

(この服は洗ったらすぐにきれいになった。)

b. ?? 老酒 一 记 喝 当□<sub>马上就</sub> 醉 哉了。

lo<sup>112-12</sup> tɕY<sup>42</sup> ʔiŋ<sup>4</sup> tɕi<sup>24-44</sup> həŋ<sup>4</sup> tɔŋ<sup>534-44</sup> tɕY<sup>24</sup> tse<sup>24</sup> tse<sup>534-22</sup>

(お酒を飲んだとたんに酔ってしまった。)

例文で示したように、嵯州方言において、(8a-b)の文は問題なく言えるが、(9a-b)の文の許容度はいずれも非常に低く、非文法的と判断する話者もいる。しかし、これらの表現を標準語に訳すと、「一敲就碎，一戳就破，一洗就干净，一喝就醉」になり、中国語の母語話者は、違和感を感じないと判断した。標準語のこの構文には活動動詞でも入ることができるのに対して、嵯州方言の対応する構文には(「记」を用いるせいか)活動動詞が入りにくいことが浮かび上がる。次に、V<sub>2</sub>が移動などを表す動詞の例文(10)-(11)を見てみよう。

(10) a. 颗 钉头<sub>钉子</sub> 一 记 敲 当□<sub>马上就</sub> 进 去 哉了。

k<sup>h</sup>o<sup>534-53</sup> tɕiŋ<sup>534-53</sup> dY<sup>312-31</sup> ʔiŋ<sup>4</sup> tɕi<sup>24-44</sup> k<sup>h</sup>o<sup>534</sup> tɔŋ<sup>534-44</sup> tɕY<sup>24</sup> tɕiŋ<sup>24-44</sup> tɕ<sup>h</sup>i<sup>24</sup> tse<sup>534-22</sup>

(この釘は打ったらすぐに刺さっていった。)

b. 只 篮球 一 记 踢 当□<sub>马上就</sub> 过 去 哉了。

tsəŋ<sup>4</sup> læ<sup>312-31</sup> dʒY<sup>312-21</sup> ʔiŋ<sup>4</sup> tɕi<sup>24-44</sup> t<sup>h</sup>iŋ<sup>4</sup> tɔŋ<sup>534-44</sup> tɕY<sup>24</sup> ko<sup>24-44</sup> tɕ<sup>h</sup>i<sup>24</sup> tse<sup>534-22</sup>

(このバスケットボールは蹴ったらすぐに飛んでいった。)

(11) a. \*条 凳<sub>凳子</sub> 一 记 搬 当□<sub>马上就</sub> 过 去 哉了。

dio<sup>312-22</sup> tɔŋ<sup>24</sup> ʔiŋ<sup>4</sup> tɕi<sup>24-44</sup> pœ<sup>534</sup> tɔŋ<sup>534-44</sup> tɕY<sup>24</sup> ko<sup>24-44</sup> tɕ<sup>h</sup>i<sup>24</sup> tse<sup>534-22</sup>

(この椅子は持ち上げられたとたんに運ばれていった。)

b. \*部 汽车 一 记 开 当□<sub>马上就</sub> 过 去 哉了。

bu<sup>24-22</sup> tɕ<sup>h</sup>i<sup>24</sup> ts<sup>h</sup>o<sup>534-34</sup> ʔiŋ<sup>4</sup> tɕi<sup>24-44</sup> k<sup>h</sup>e<sup>534</sup> tɔŋ<sup>534-44</sup> tɕY<sup>24</sup> ko<sup>24-44</sup> tɕ<sup>h</sup>i<sup>24</sup> tse<sup>534-22</sup>

(この車は動き出したとたんに行ってしまった。)

(10)に出ている動詞の「敲(叩く)」と「踢(蹴る)」は一回的動詞であるのに対して、(11)に出ている動詞の「搬(持ち上げて運ぶ)」と「开(動き出す、運転する)」は活動動詞である。例で示したように、一回的動詞が使用される場合には文法的な文となるが、活動動詞が使用される場合には非文になる。これも嵯州方言では一回的動詞と活動動詞が異なる文法的振る舞いをしていることを示している。この点については、標準語でも一回的動詞と活動動詞は異なる振る舞いをするを指摘しておこう。次の

文は例 (10) と (11) に対応する標準語である。

(12) a. 这颗钉子一敲就进去了。

(この釘は打ったらすぐに刺さっていった。)

b. 这个篮球一踢就过去了。

(このバスケットボールは蹴ったらすぐに飛んでいった。)

(13) a. \* 这条凳子一搬就过去了。

(この椅子は持ち上げられたとたんに運ばれていった。)

b. \* 这辆汽车一开就过去了。

(この車は動き出したとたんに行ってしまった。)

(12) と (13) の「进去 (入る一行く)」「过去 (超える一行く)」は移動を表す動詞であり、これらが  $V_2$  に来る場合には、 $V_1$  の位置には一回的動詞しか現れず、「搬 (持ち上げて運ぶ)」や「开 (動き出す、運転する)」などの活動動詞が現れると、非文になってしまう。

### 2.3.2. 形態・統語的振る舞い——テスト② [V 記 V 記]

嵯州方言には「V 記 V 記」という標準語の「一 V 一 V」(例えば、一闪一闪、一眨一眨)に相当する表現が存在する。このような表現は動作が絶えず繰り返し行なわれるという意味を表し、連用修飾や述語として使用される。嵯州方言で、一回的動詞はすべてこの形式に入ることができる。次の例で確認しよう。

(14) a. 闪 记 闪 记

sœ<sup>42</sup> tɕi<sup>24-42</sup> sœ<sup>42</sup> tɕi<sup>24-42</sup> (ピカピカと光る)

b. 天空 高头上 个的 星星 闪 记 闪  
记 介地。

t<sup>h</sup>ie<sup>534-53</sup> k<sup>h</sup>oŋ<sup>534-34</sup> ko<sup>534-53</sup> dY<sup>312-31</sup> kəŋ<sup>4</sup> ɕiŋ<sup>534-53</sup> ɕiŋ<sup>534-53</sup> sœ<sup>42</sup> tɕi<sup>24-42</sup> sœ<sup>42</sup>  
tɕi<sup>24-42</sup> ka<sup>24-22</sup>

(空の上の星はピカピカと光っている。)

(15) a. 跳 记 跳 记

t<sup>h</sup>io<sup>24</sup> tɕi<sup>24-42</sup> t<sup>h</sup>io<sup>24</sup> tɕi<sup>24-42</sup> (繰り返し跳ぶ)

b. 伊他 跳 记 跳 记 介地 过来 哉了。

fi<sup>112-12</sup> t<sup>h</sup>io<sup>24</sup> tɕi<sup>24-42</sup> t<sup>h</sup>io<sup>24</sup> tɕi<sup>24-42</sup> ka<sup>24-42</sup> ko<sup>24</sup> le<sup>312-22</sup> tse<sup>534-42</sup>

(彼は跳びながらやってきた。)

(14)–(15)に出ている動詞は「閃」「跳」であるが、ほかの一回的動詞もすべてこの表現に入ることができる。しかし、活動動詞はそれができない。次の例を見てみよう。

(16) a. \*吃 记 吃 记

tɕ<sup>h</sup>oŋ<sup>24</sup> tɕi<sup>24</sup> tɕ<sup>h</sup>oŋ<sup>24</sup> tɕi<sup>24</sup> (繰り返し食べる)

b. \*依<sub>你</sub> 吃 记 吃 记 介 来<sub>东在</sub> 糟<sub>西</sub>干什么?  
noŋ<sup>112-12</sup> tɕ<sup>h</sup>oŋ<sup>24</sup> tɕi<sup>24</sup> tɕ<sup>h</sup>oŋ<sup>24</sup> tɕi<sup>24</sup> ka<sup>24-42</sup> le<sup>312-22</sup> toŋ<sup>534-24</sup> tso<sup>534-53</sup> ɕi<sup>534-34</sup>

(あなたは(繰り返し)食べながら何をしているの。)

(17) a. \*困<sub>睡</sub> 记 困<sub>睡</sub> 记

k<sup>h</sup>uən<sup>24</sup> tɕi<sup>24-42</sup> k<sup>h</sup>uən<sup>24</sup> tɕi<sup>24-42</sup> (繰り返し寝る)

b. \*依<sub>你</sub> 困<sub>睡</sub> 记 困<sub>睡</sub> 记 介<sub>地</sub> 来<sub>东在</sub> 糟<sub>西</sub>干什么?  
noŋ<sup>112-12</sup> k<sup>h</sup>uən<sup>24</sup> tɕi<sup>24-42</sup> k<sup>h</sup>uən<sup>24</sup> tɕi<sup>224-42</sup> ka<sup>24-42</sup> le<sup>312-22</sup> toŋ<sup>534-24</sup> tso<sup>534-53</sup> ɕi<sup>534-34</sup>

(あなたは(繰り返し)寝ながら何をしているの。)

一部の動詞は活動動詞と一回的動詞の両方の意味解釈ができる。例えば、「看」という動詞は「読む、見る」という意味を持つ一方で、一回的動詞として「ちらっと見る」という意味も持っている。よって、「V 记 V 记」パターンに入る時には「ちらっと見る」という意味に解釈される。例を見てみよう。

(18) a. \*伊<sub>他</sub> 看 记 看 记 看 得<sub>了</sub> 半<sub>日</sub>半<sub>天</sub> 电视  
哉<sub>了</sub>。

fɿ<sup>112-12</sup> k<sup>h</sup>œ<sup>24</sup> tɕi<sup>24-42</sup> k<sup>h</sup>œ<sup>24</sup> tɕi<sup>24-42</sup> k<sup>h</sup>œ<sup>24</sup> tɔŋ<sup>24</sup> pœ<sup>24</sup> nɔŋ<sup>2-4</sup> diɛ<sup>13-11</sup> zi<sup>112-12</sup>  
tse<sup>534-22</sup>

(彼は長い間繰り返しテレビを見た。)

b. 伊<sub>他</sub> 看 记 看 记 看 得<sub>了</sub> 我 半<sub>日</sub>半<sub>天</sub> 哉<sub>了</sub>。

fɿ<sup>112-12</sup> k<sup>h</sup>œ<sup>24</sup> tɕi<sup>24-42</sup> k<sup>h</sup>œ<sup>24</sup> tɕi<sup>24-42</sup> k<sup>h</sup>œ<sup>24</sup> tɔŋ<sup>24</sup> ŋo<sup>112-12</sup> pœ<sup>24</sup> nɔŋ<sup>2-4</sup> tse<sup>534-22</sup>

(彼は長い間私を繰り返しちらっと見た。)

(18a)と(18b)は同じ「看」という動詞を使っているが、(18a)は活動動詞の解釈の場合で、(18b)は「ちらっと見る」という解釈なので、一回的動詞と思われる。従って、(18a)は非文法的な文であるのに対して、(18b)の文はまったく問題がない。標準語の「一V一V」形式にも一回的動詞は入るが、嵯州方言の「V 记 V 记」形式より明確な違いがない。

- (19) a. 一闪一闪 (繰り返し閃く)  
 b. 一跳一跳 (繰り返し跳ぶ)  
 c. ? 一敲一敲 (繰り返し叩く)  
 d. ?? 一咳(嗽)一咳(嗽) (繰り返し咳をする)

例(19)の中の「閃(閃く)、跳(跳ぶ)、敲(叩く)、咳(嗽)(咳をする)」はすべて一回的動詞である。「閃、跳」は問題なく文法的なフレーズを作ることができるが、「敲、咳(嗽)」は母語話者によって意見が分かれ、許容度がかなり低くなる。このように、「V 記 V 記」という形式に入れるか否かは嵯州方言での活動動詞と一回的動詞を分ける有効なテストになるが、中国語標準語の場合にはそうではないことが分かる。

### 2.3.3. 結果補語を取る場合——テスト③ [V 記 R]

嵯州方言では活動動詞と一回的動詞の違いは、命令文でかつ結果補語を取るときに顕著に現れる。呉語には処置を表す命令文において、動詞の直後や文末に、処置の対象を指し示す三人称代名詞を付け加える「再述代名詞 (resumptive pronoun)」の用法が先行研究で指摘されている。この用法に関しては、劉丹青 (2001) は上海方言の「伊」を、范可育 (1988) は寧波方言の「其」が挙げられる。具体例を見てみよう。

- (20) 依<sub>你</sub>地板拖拖伊<sub>他</sub>。(床をモップで拭いてください。)

(劉丹青 2001: 336)

- (21) 繩依<sub>你</sub>縛<sub>系</sub>其他牢。(繩をしっかりと縛ってください。)

(范可育 1988: 292)

(20)の「伊」は上海方言における三人称の代名詞で、ここでは文末に置かれ、処置対象の「地板(床)」を指し示している。(21)の「其」は寧波方言の三人称代名詞で、ここでは動詞と結果補語の間に置かれ、処置対象の「繩(縄)」を指し示している。三人称代名詞が再述代名詞として使われるこの文法現象は標準中国語には見られない。

嵯州方言にもこのような現象があり、特に、活動動詞と一回的動詞の差は動詞が結果補語を取る時にも出てくる。まず、データを確認しよう。

(22)–(25)の文はすべて命令文である。

- (22) a. 只 鸡蛋 拔<sub>給</sub> 我 敲 伊<sub>他</sub> 碎。  
 tsəŋ<sup>4</sup> tci<sup>534-53</sup> dæ<sup>13</sup> pəŋ<sup>4</sup> ŋo<sup>112-12</sup> kʰo<sup>534-53</sup> fi<sup>112-12</sup> se<sup>24</sup>

- b. 只 鸡蛋 拨<sub>給</sub> 我 敲 记 碎。  
 tsəŋ<sup>4</sup> tɕi<sup>534-53</sup> dæ<sup>13</sup> pəŋ<sup>4</sup> ŋo<sup>112-12</sup> kʰo<sup>534-53</sup> tɕi<sup>24</sup> se<sup>24</sup>  
 (この玉子を(私に)粉々に割ってください。)
- (23) a. 头发 拨<sub>給</sub> 我 剪 伊<sub>他</sub> 短。  
 dY<sup>312-31</sup> fəŋ<sup>4</sup> pəŋ<sup>4</sup> ŋo<sup>112-12</sup> tɕiE<sup>42</sup> fi<sup>112-31</sup> tɕe<sup>42</sup>  
 b. 头发 拨<sub>給</sub> 我 剪 记 短。  
 dY<sup>312-31</sup> fəŋ<sup>4</sup> pəŋ<sup>4</sup> ŋo<sup>112-12</sup> tɕiE<sup>42</sup> tɕi<sup>24-42</sup> tɕe<sup>42</sup>  
 (髪の毛を(私に)短く切ってください。)

(22) と (23) の文に出る動詞は「敲(叩き割る)」、「剪(はさみで切る)」という一回的動詞である。これらの動詞が使用される場合、「伊」のかわりに「记」で置き換えることも可能で、また、(a) と (b) の間に意味の差は感じられない。しかし、動詞が活動動詞の場合にはそれができない。次の例を見てみよう。

- (24) a. 件 衣裳 拨<sub>給</sub> 我 孚<sub>洗</sub> 伊<sub>他</sub> 清爽<sub>干净</sub>。  
 dzie<sup>312-22</sup> i<sup>534-53</sup> zɔŋ<sup>312-31</sup> pəŋ<sup>4</sup> ŋo<sup>112-12</sup> fu<sup>24</sup> fi<sup>112-31</sup> tɕhiŋ<sup>534-53</sup> saŋ<sup>42</sup>  
 b. \*件 衣裳 拨<sub>給</sub> 我 孚<sub>洗</sub> 记 清爽<sub>干净</sub>。  
 dzie<sup>312-22</sup> i<sup>534-53</sup> zɔŋ<sup>312-31</sup> pəŋ<sup>4</sup> ŋo<sup>112-21</sup> fu<sup>24</sup> tɕi<sup>24-42</sup> tɕhiŋ<sup>534-53</sup> saŋ<sup>42</sup>  
 (この服を(私に)きれいに洗ってください。)
- (25) a. 碗 饭 拨<sub>給</sub> 我 吃 伊<sub>他</sub> 完。  
 uɕe<sup>42</sup> vɛ<sup>13</sup> pəŋ<sup>4</sup> ŋo<sup>112-12</sup> tɕioŋ<sup>4</sup> fi<sup>112-12</sup> uɕe<sup>312</sup>  
 b. \*碗 饭 拨<sub>給</sub> 我 吃 记 完。  
 uɕe<sup>42</sup> vɛ<sup>13</sup> pəŋ<sup>4</sup> ŋo<sup>112-12</sup> tɕioŋ<sup>4</sup> tɕi<sup>24</sup> uɕe<sup>312</sup>  
 (このご飯を(私に)きれいに食べてください。)

(24) と (25) の例では一回的動詞のかわりに、「孚(洗う)」、「吃(食べる)」などのような活動動詞が使用されている。このような文では、「伊」は使えるが、「记」で置き換えることは不可能で、動詞と結果補語の間には「伊」しか現れることはできない。

なお、以上の三つのテストは嵯州方言の場合いずれも回数・時量表現の「记」という呉語特有の形態素が関わることは偶然ではなかろう。標準語に関しては、テスト③は対応する表現がなかった。テスト①と②は、嵯州方言の「记」に対応する「一」も一回性 (semelfactivity) と量に関する

表現であるが、一回的動詞以外の動詞とも共起可能であったことから、標準語の「一」は共起する動詞との制約が「記」ほど厳しくないという見方ができる。この問題は、標準語における一回性の表現手段の問題と関わる。これに関しては第3章でより詳しく論じる。

### 3. 「記」の位置づけ及び一回的動詞という動詞タイプを立てる必要性に関する議論

第1章では先行研究において一回的動詞がどのように扱われたかを確認し、多くの研究では活動動詞と同定しており、一部の研究では独立した動詞タイプを立てているものの、形態的・文法的な証拠は提示されていないという結論を得た。第2章では筆者の母語である嵯州方言のデータを使用し、主に回数表現として使用される「記」を中心に一回的動詞と活動動詞が形態的・文法的に異なる振る舞いをしていることについて議論した。本章では、嵯州方言における「記」の位置づけ及び通言語的に一回性 (semelfactivity) という文法カテゴリーがどのような形式で表されているかを確認し、さらにそれを中国語に応用、検討した上で、標準語及び嵯州方言において一回的動詞というタイプを設ける必要があるか否かについて議論する。

新たな動詞のタイプを立てる必要性について議論する際に、文法的振る舞いのほか、形式的にマークされるか否かも重要な基準の一つである。ある言語において一回的動詞が形式的に他の動詞と異なれば、当該言語ではそのような動詞に独立した動詞タイプを立てる必要性があると言えよう。ロシア語には完結アスペクト (perfective) の形しか持たない動詞には *-nu-* という接辞がつく、具体的には *kašljanut* (一回咳をする)、*blesnut* (一回閃く) などの例が挙げられる。前述したように、ヤーホントフは中国語の「一V」をロシア語の *-nu-* を含む動詞に訳すことが妥当だということに触れている。また、ハンガリー語にはこれらの動詞をマークするいくつかの接尾辞が存在し、*zörren* (一回ノックする) の例が挙げられる (Comrie 1976: 43)。それ以外に、ロシア語と同様に、同じスラブ語派に属するセルビア語にもロシア語と同じ接辞 *-nu-* が見られることが Milićević (2004) において指摘されている。また、これらの形態的にマーカーがある言語の



場合でも英語と中国語の一回的動詞とみなされる動詞と意味が対応していることが分かる。このように、中国語以外の言語では一回性 (semelfactivity) が形態的手段によって形式的にマークされることが報告されている。これらの言語では一回的動詞は他のタイプの動詞と区別する形式的なマーカーがあり、独立した動詞タイプを立てたほうが良いと言えよう。しかし、中国語の動詞にはこのような形態的手段がないため、一回性を表すために、語彙的な手段に依存していると言える。例えば、「一回跳ぶ」という意味を表すには動詞の内在的アスペクト特徴でなく、「一下」のような動詞以外の回数表現に依存し、動詞の内在的アスペクトに頼る部分が目立たない。

前章で見てきたように、嵯州方言には形態的に一回的動詞と活動動詞を区別できる「V 记 V 记」があるが、それに対応する標準語の言い方は両者を区別する有効なテストにはならない。文法的にも、嵯州方言にはこの二つのタイプの動詞を分ける構文が存在するが、このような構文に対応する標準語の言い方がないか、或いは、構文があっても明確な違いが出ないのが事実である。以上をまとめると、嵯州方言の一回的動詞は標準語のそれより動詞の内在アスペクトが目立っており、文法現象にも反映され、嵯州方言での「记」は一回的動詞としか共起できず、活動動詞とは共起できないと言えよう。これに対して、標準中国語において、「记」の対応形式である「一」は動詞との共起制限を示さない。嵯州方言において「记」をどのように位置づければ良いであろうか。1.3. で述べたように、研究者によって標準語では動詞の前に置かれる「一」を一回的アスペクトマーカーとして認めるか否かに関してばらつきが見られ、必ずしも一致した意見が得られたとは限らない。筆者はそれは動詞との共起制限にも関連していると主張する。嵯州方言での「记」は 2.3. で述べた文法環境で一回的動詞としか共起できない点においては一回的動詞と活動動詞を区別するパラメーターとなり、一回的アスペクトマーカーであることが考えられる。しかし、標準語の「一」は一回的動詞なのか活動動詞なのかの共起制限を示さないため、完全な一回的アスペクトマーカーにはなっていないと言えよう。

従って、嵯州方言では一回的動詞というタイプを立てる根拠は十分であ

るが、標準中国語においては活動動詞と明確な文法的振る舞いの違いが出ないため、一次的動詞を独立した動詞タイプとして立てる根拠が不十分である。また、標準語の「一」と「一下」はどのように一回性を表すのか、両者の関係はどのようなものか、さらに嵯州方言における一次的アスペクトマーカ―の「记」との違いは何かについては今後の課題にしたい。

〈注〉

- 1) 各用語の日本語訳は影山（1996）に従う。
- 2) 筆者訳、以下同様。Smith（1991）原文は“Semelfactives are single-stage events with no result or outcome. They have the features Dynamic, Atelic, Instantaneous. (Smith 1991: 29)”、van Valin（2005）の原文は“Semelfactives are punctual events which have no result state. (van Valin 2005: 32)”
- 3) 「在现代汉语里，词素“一”作为辅助词跟动词和形容词结合时，用作动词的一次性和削弱性的标志」。（龙果夫 1958: 181）
- 4) 「记」の漢字表記は钱曾怡（2005）に基づいて表記する。「记」は単独では [tʃi]（調値 24）と発音されるが、連続変調によって前後に置かれる語の声調によって声調が変化する。また、実際発音する際、通常より強い摩擦音を伴う。
- 5) この分類は吕叔湘（1999: 565）が「下」に対して行っている分類と共通点があるが、吕叔湘（1999）では「短い時間を指す用法」と本稿でアスペクト用法として扱っている「動作の短さを表す用法」を分けない。
- 6) 漢字不明の形態素については□で表すか同音の当て字を使う。また、形態素の漢字表記は钱乃荣（2002）に従う。同音字を使う場合には字の下に波線（~~~~）を引く。方言語彙の分かりにくい語の意味に関しては右側に小さい文字で示す。標準語のデータに関しても引用の出所がなければ、筆者による作例である。

〈参考文献〉

- 影山太郎 1996. 『動詞意味論一言語と認知の接点―』, 日英語対照研究シリーズ (5). 東京: くろしお出版。
- 吕叔湘 2003. 牛島徳次他編訳『中国語文法用例辞典』. 東京: 東方書店。
- ヤーホントフ 1987. 橋本萬太郎訳『中国語動詞の研究』, 中国語学研究叢書 3. 東京: 白帝社。
- 陈 光 2003. 「准形态词“一”和现代汉语的瞬时体」, 『语言教学与研究』2003年第5期: 17-24页。
- 陈 平 1988. 「论现代汉语时间系统的三元结构」, 『中国语文』1988年第6期: 401-422页。

- 戴耀晶 1997.『现代汉语时体系统研究』。杭州：浙江教育出版社。
- 邓守信 1985.「汉语动词的时间结构」,『语言教学与研究』1985年第4期:7-17页。
- 范可育 1988.「宁波话“绳(依)缚其牢”格式」,复旦大学中国语言文学研究所吴语研究室编『吴语论丛』:292-296页。上海:上海教育出版社。
- 郭 锐 1993.「汉语动词的过程结构」,『中国语文』1993年第6期:410-419页。
- 贺 巍 1989.『获嘉方言研究』。北京:商务印书馆。
- 刘丹青 2001.「吴语的句法类型特点」,『方言』2001年第4期:332-343页。
- 刘月华,潘文娉,故鞞 2001.『实用现代汉语语法(增订本)』。北京:商务印书馆。
- 龙果夫 1958.『现代汉语语法研究』(第一卷词类)。北京:科学出版社。
- 吕叔湘 1999.『现代汉语八百词(增订本)』。北京:商务印书馆。
- 马庆株 1981.「时量宾语和动词的类」,『中国语文』1981年第2期:86-90页。
- 钱乃荣 2002.「北部吴语的特征词」,李如龙编『汉语方言特征词研究』:100-129页。厦门:厦门大学出版社。
- 钱曾怡 2005.「嵊县长乐话语法两则」,上海市语文学会/香港中国语文学会合编『吴语研究(第三届国际吴方言学术研讨会论文集)』:260-265页。上海:上海教育出版社。
- 石毓智 2001.『语法的形式和理据』。南昌:江西教育出版社。
- 朱德熙 1982.『语法讲义』。北京:商务印书馆。
- Chao, Yuan Ren. 1968. *A Grammar of Spoken Chinese*. Los Angeles: University of California Press.
- Comrie, Bernard. 1976. *Aspect*. New York: Cambridge University Press.
- He, Baozhang. 1992. *Situation Types and Aspectual Classes of Verbs in Mandarin Chinese*. PhD thesis. The Ohio State University.
- Milićević, Nataša. 2004. The Lexical and Superlexical Verbal Prefix *iz-* and its Role in the Stacking of Prefixes. In Svenonius, Peter. (ed.), *Nordlyd 32.2: Special issue on Slavic prefixes*. 279-300.
- Smith, Carlota. 1991. *The Parameter of Aspect*. Dordrecht: Kluwer-Reidel.
- Tai, James H-Y. 1984. Verbs and Times in Chinese: Vendler's Four Categories. *Lexical Semantics*. Chicago Linguistics Society. 289-296.
- Van Valin, Robert. 2005. *Exploring the Syntax-Semantics Interface*. New York: Cambridge University Press.
- Vendler, Zeno. 1967. *Linguistics in Philosophy*. Itchaca, New York: Cornell University Press.
- Xiao, Richard. and McEnery, Tony. 2004. *Aspect in Mandarin Chinese: A corpus-based study*. Amsterdam/Philadelphia: John Benjamins Publishing Company.

### 〈謝辞〉

本稿は2008年度に東京大学に提出した修士論文の一部に加筆修正したものである。本稿の執筆にあたり、熱心にご指導くださったクリスティーン・ラマール先生、楊凱榮先生、吉川雅之先生、ならびに有益なご助言を下された査読委員の先生方に心より感謝申し上げます。

## 浙江省嵊州方言の“一次动词”初探

**提要** 本文主要就汉语中是否有必要将以“敲，閃”为代表的一次动词从活动动词中单独分出划为一类进行探讨。在讨论分类时，笔者以语法表现形式的不同作为动词分类的出发点，以浙江嵊州方言为重点论述对象，对两类动词进行了分析。论文指出嵊州方言中存在着三种与“记”密切相关的区分这两种动词的语法表现形式。嵊州方言中的“记”可认为是一次体的标记，在嵊州方言中，有充分的理由将这些动词在分类上加以区分。然而，这些语法形式在普通话中不是不存在，就是不能有效区分这两种动词。例如，普通话中存在与“记”相对应的，前置于动词的“一”的用法，但“一”对动词的选择作用并不明显。因此我们认为普通话中将这类动词单独分类的理由还不够充分。

**关键词** 一次动词 动词分类 体 吴方言